

## 朝鮮学士の日記・紀行文に見る朝鮮通信使の旅

### THE TRAVEL OF A KOREAN DELEGATION TO JAPAN

As seen in the Diaries and Travel Records of Korean Scholars

朴 賛 基\*

During the Edo period, twelve Korean delegations travelled to Japan ; they accomplished exchanges on a cultural level through folk performances and poetry and were also exposed to several incidents. Among them, the delegation of 1764 offers a good image of the exchanges between the two countries as well as the feelings the ordinary Japanese held against the Koreans, both aspects being at the time at a turning point.

I shall focus on the 11<sup>th</sup> Korean delegation, the one of 1764, trying to bring to light its true image on basis of Japanese and Korean documents that refer to it.

As records of the 11<sup>th</sup> delegation there are : ambassador's Cho Eom *Haesa-Ilki*, chief secretary's Nam Ok *Ilkwanki* and *Ilkwan Chang Jak*, secretary's Seong Dae Jung *Ilbon-Rok*, secretary's Won Jung Keo *Seungsa-Rok* and *Hwa Kuk-ji*, *Li-Eon Jin's Song Mok Kwan Sin Yo Ko*, O Dae

---

\*PARK Chan-Ki 慶南大・韓国外国語大学で日本古典文学を専攻、東京学芸大学で修士課程・博士課程を終える。現在木浦大学校助教授。朝鮮通信使と歌舞伎、浄瑠璃、小説の関連を考察した論文を多数発表している。

Ryung's *Gaemi-Saheng-Ilki*, clerk's Kim In Kyom *Il Dong Jangyu Ga* to name only a few.

From the Japanese side, records such as *Chosenjin - Raihei - Gyoretsu*, *Kanshi - Raihei - Kiroku*, *Horeki-14nen-Chosen-Shiki*, *Chosen-Raihei-Horeki-Monogatari* and many others have remained.

I shall center my discussion on ambassador's Cho Eom's *Haesa-Ilki* and Kim In Kyom's *Il Dong Jangyu Ga* and, through a comparison with other records such as listed above, I shall look describe a few incidents and at the exchanges between the two countries.

At the same time, I shall look at the feelings the ordinary Japanese of the time held against the Koreans.

Last but not least, the poem making sessions held by Korean and Japanese literati together at the various points during the delegation's journey can be said to have been a distinctive way of collaboration between the two countries and, at the same time, a good opportunity for the literati of the countryside to check the depths of their knowledge. I would like to illustrate this affirmation with concrete examples.

日本の江戸時代において朝鮮通信使の訪日は十二回行なわれており、その間には様々な事件及び両国の文化や芸能、詩文贈答等の交流の状態を見ることができる。特に十八世紀後半における朝鮮通信使の訪日（十一回目、明和元年（1764）は両国の交流という面、日本の一般民衆の対朝鮮観の在り方を探るといふ面において一つの転換期であったと思われる。

甲申年（1764）の訪日は、第十代將軍徳川家治の襲職を祝うべく、宝暦十三年（1763）十月六日釜山浦を出発し翌年六月二十二日釜山浦に帰着、七月八日朝鮮の王英祖に復命するまで、まる九ヶ月に及ぶ長途の旅であった。

明和元年（1764）の旅の記録としては朝鮮通信使の正使趙曦の『海槎日記』、

製述官南玉の『日観記』・『日観唱酌』、書記成大中の『日本録』、書記元重挙の『乗槎録』・「和国志」、李彦瑱の『松穆館燼余稿』、呉大齡の『癸未使行日記』、書記金仁謙の『日東壯遊歌』等がある。

日本側の記録も『朝鮮来人聘行列』、『韓使來聘記録』、『宝暦14年朝鮮使記』、『朝鮮來聘宝暦物語』等数多く見られる。

本稿では、『海槎日記』（韓国国立中央図書館所蔵）<sup>①</sup>、『日東壯遊歌』<sup>②</sup>を中心とし、その他の諸記録を比較・検討することによって、朝鮮通信使一行の日本体験と両国の交流の状態を探ってみることとする。

さらに、朝鮮通信使の路程、各館にて行われる日本の文人たちとの漢詩贈答と筆談の交歓は両国の交流を深める一つの特徴的在り方でもあり、また地方の学者にとっては、学問の程度を試す絶好の機会でもあったのである。これらのことについての具体的な様子を実証的に考察してみることとする。

最後に、今回の訪日の際に起った様々な事件・事故とそれを取り入れた文学作品との関係及びその文芸化の過程を考察してみる。

## 1、甲申年（1764）朝鮮通信使の訪日

宝暦十三年（1763）八月三日朝鮮の英祖国王から日本の徳川家治将軍宛ての国書と「好往好来」の御筆を賜った朝鮮通信使一行は漢陽を出発し、八月二十二日釜山に着く。ここで順風を待つこと一ヶ月余り、十月六日対馬島迎聘使の案内を受けながら釜山浦を出船し、対馬島に向う。対馬島の府中（厳原）で島主宗義暢の迎えをうけた一行の旅は案内役対馬島守宗氏と共に壱岐（十一月十三日）、築前州藍島（十二月三日）、赤間関（十二月二十七日）、備前州日比（明暦元年一月二日）、幡摩州室津（一月十六日）、大坂城（一月二十五日）、京都（一月二十八日）、鳴護屋（二月三日）、遠江州荒井（二月六日）、相模川小田原（二月十三日）、武蔵州品川（三月十五日）、江戸（二月十六日）という順路で続いた。一行は二月二十七日新将軍徳川家治に謁見して国書を伝達するなど、所期の用務を終え、三月十一日帰路につくのである。帰路も逆順路で続い

て六月二十日に対馬島に着き、六月二十二日に釜山に帰還、七月八日に漢陽に帰り復命するまで、まる十一ヶ月の長い旅であった。

この旅は水路三千三百余里、陸路一千三百余里、都合五千里（朝鮮の里数）に近い長い道程で、その間には様々な事件・事故及び交流の状態が伺える。特に水路では暴風、怒涛の中での苦しみ、船が漂流するといった死境を往き来する命がけの旅であったのである。

以下、この旅についての両国の記録『海槎日記』、『日東壯遊歌』、『韓使來聘記録』、『宝暦十四年朝鮮使記』等による朝鮮通信使一行座目を記す。

正使 通政大夫吏曹参議知制教 趙曦字明瑞 号濟谷 己亥生戊午司馬壬申庭試豊壤人 四十五齡

副使 通政大夫行弘文館校理知制教 李仁培字秀修 号吉菴 全義人 四十八齡

従事官 通政大夫行弘文館校理知制教 金相翊字仲佑 号弦菴 辛丑生光山人 四十三齡

製述官 前結城県監 南玉 号秋月 壬寅生宜寧人 四十二齡

書記 正使属 前銀溪察訪 成大中字士執 号龍淵 庚子生昌寧人 三十三齡

書記 副使属 前長興庫奉琴 元重挙字子才 号玄川 己亥生原城人 四十五齡

書記 従事属 成均進士 金仁謙字士安 号退石 丁亥生安東人 五十七齡

（都合480人、以下略す。）

さらに、この通信使の訪日においては、対馬島守の宗家が代々その案内役を担当するのであるが、これについては『韓使來聘記録』が詳しい。

信使総司 対馬州太守拾遺 平義暢

信使接伴 京師万年山相国承天禪寺賜紫沙門洋胆 字維天 号葛陂 大和人

信使接伴 京師恵日山東福禪寺 龍芳字桂巖号臥雲 京師人即船院

そもそも、朝鮮通信使訪日の目的は新たなる将軍の職位を祝うべきものとして、新将軍の謁見を通して朝鮮国王からの親書を伝達し、帰路に徳川将軍の答書をもって帰国し、復命することであった。これについては『日東壯遊歌』がその儀式の様子を次のように記す。

二十七日雨。国書を伝達する時、使臣たちは朝服を着、幕府官僚たちは戎服、文士と通詞たちは官服を着ている。使臣たちは輿に乗り、下官たちは連れ添い、旗と武器を持ち、楽器を鼓吹しながら、六行礼が行列する。  
(中略)

国書を持って入り、礼をなす。謝礼単を差し上げ拝礼した後、関白が施す酒宴に参加し、拝礼す。帰りにもう一度拝礼し、合わせて四拝礼である。千乗国が禮冠禮服を着て、髪を削った日本に四拝礼すべきなのか。(翻訳は筆者による。以下同じ)

明和元年（1764）二月二十七日、江戸城に入城する通信使一行の様子や国書伝達の儀式に対する作者の些か批判的な態度が述べられている。この日の儀式には書記金仁謙は個人的な理由で参加しなかったものであり、<sup>③</sup>『日東壯遊歌』の上の文は儀式に参加する準備段階での記述である。さらに、詳しいのが『海槎日記』の次の文である。

国書于堂西、三使列坐于堂中西向、島主及兩館伴坐於庁邊、各州太守及百官皆会坐於使臣之左邊、及後坐者、殆過数百人、皆載一角巾、或着黒袍或着紅袍、官尊者以黒、官卑者以紅云矣、島主請先入見 国書奉安処及使臣行礼処所、故随入以見、則関白正堂庁有三層、層不踰半尺、広不過三間、并三層而長可為七八間矣、上層則関白所坐処、故遮障之、使臣行礼則先行於中層、後行於下層云矣、

国書伝達の儀式の場面を記録したのであるが、この際の国書の内容については『海槎日記』、『宝暦十四年朝鮮使記』がその詳細を記す。以下、その一文を引用する。

朝鮮国王 李吟奉書

日本国大君殿下 聘信之曠、一紀有余、窃聞殿下、續承令緒、撫寧海宇、其在交好、曷勝欣聳、茲循故常、亟馳使价、致慶修睦、隣誼則然、土宜雖薄、聯表遠忱、惟冀勉恢前烈、茂膺新祉、不備

癸未年八月 日

朝鮮国王 李 吟

善隣友好関係を願う朝鮮国王の国書の記述である。これを受け取った新将軍は通信使一行に宴会を催し、江戸からの帰途の際朝鮮国王宛の投書を渡す。これも同じく『海槎日記』がその内容を記す。

日本国源家治奉復

朝鮮国王殿下 信使遐臻、聘儀寔盛、就審起居安寧、嘉慶殊深、方今以承紹前緒、撫育群黎、仍由旧典、斯叙新權、幣物既厚、禮意且隆、乃知敦兩國講信之意、而昭奕世修睦之誼也、言將菲品、附諸歸使、惟冀永締隣好、共奉天体、不備

甲申三月 日

日本国源家治

とあり、政治的な役割を担う親善使節としての朝鮮通信使の訪日が行われたのである。また、この国書伝達の際は国書と共に「別幅」といって献上物が渡されたのであり、新将軍からも国書と共に「別幅」（献上物）が渡されたのであ

る。それに加えて通信使一行には餞別金をも送られたのである。つまり、朝鮮通信使訪日の目的は先述したように、徳川新將軍の襲職を祝う親善使節としての、いわば政治的意図のもとで行われたものといつてよいであろう。

ところが、朝鮮通信使訪日の際においては、勿論政治的役割も果たしたものの、それよりはむしろ文化的・学術的交流の側面及び社会制度・風習等により大きな関心や意義を有していたようである。それは『海槎日記』、『日東壯遊歌』等に散見する文化・風俗等についての筆談・唱酬の様子頻出からも類推されるのである。

## 2、朝鮮学士との交歓

日本の文人たちが朝鮮通信使を迎えて漢詩の唱和を求め、書画の揮毫を請い、筆談を通して学問の疑問点を言い、相手国の国情を話すことは日本の江戸時代において数次にわたる朝鮮通信使の訪日の際の常例であった。特に、江戸を始めとする大阪、京都では比較的滞在期間も長く、日本全国からの交通も便利であつて通信使との接触を望む人々が集まるのであつた。それに、江戸幕府の関係者は勿論のこと、特に、儒者たちの韓使に対する期待は大きかつたようである。それを端的に指摘しているのが大阪懷徳堂学主であつた中井積善の次の文である。

韓使は文事を主張する故、随分文才に秀でたる者を撰みさしこすと見えたり。故に沿道客館にて皇国の儒臣と詩文贈答筆談の事多し。此方の儒臣多き中には文才の長ぜぬもありて、我国の出色とならぬもまま見えて残念なり。夫はさて置き、又三都にては平人までも手寄るさえあれば館中に入り贈答するに官禁も無ければ、浮華の徒先を争つて出る事なり。館中雑踏して市の如く、辣文悪詩を以て韓客に冒触し、その甚敷は一向未熟の輩、百日も前より七律一首ようやく荷い出し、それを懐中し、膝行頓首してさし出し、一編の和韻を得て終身の榮として人に誇るなど笑うべし。かかる

事なれば韓客は諸人を蔑視し、数十編の詩を前に積み置き、筆に任せて是を和するに、その中に声律ちがい、韻のちがいたるような詩あれば、墨を付けて（中略）

愚は宝暦の聘使の時、客館に行きしに唱和の始まりである席を通りかかり、右の様子は目のあたり目撃せり、（中略）故にまれまれ正学真才の人ありとも、是を愧じて始めより韓人とは声息をたちたり。韓人は是を知らずその接する所は往々右の如なれば、渠をして日本に人なしなどといわさん事は実に歎ずべき事なり<sup>④</sup>

些か批判的な記述になっているが、当時の両国の文人たちの筆談・贈答・唱酬の様子がよく表れている。そして更に、上田秋成も『胆大小心録』（文化5年）で「大阪の御堂へ、ちよと贈和に出たことがあつた、秋月・龍淵といふ二人の外は、下郎じやあつた、たゞ物をほしがる事じや」とその様子を説明している。

では、ここで朝鮮通信使の書記金仁謙の紀行文『日東壯遊歌』を通して日本の文人たちとの交流の様子をみてみよう。

備前州の五人の詩客、人名（不明）で、その中で近藤篤は戊辰年訪日の時、備前守に命じられ、使臣を迎えたことのあった文人である。人名（不明）の年老いた父、道熙という文人に、人名（不明）と唱酬した詩集一冊を渡す。父子が文人で（中略）人柄がよく筆談も秀で、詩律で夜が明けるとまで唱和し、百韻排律一首、七二韻一首、五七律古詩絶句合わせて四十首余りであった<sup>⑤</sup>

通信使一行が牛窓に泊った時のことである。近藤篤は岡山藩の文人で寛延元年（1748）の訪日の時にも通信使を迎えて唱酬を交わした人物である。また、道熙は井上蘭台という備前岡山藩の儒官であった者で、父子一緒に書記金仁謙



にあい、夜を徹して四十余首を唱和したというのである。更に、『海槎日記』にもその様子を次のように記す。

標旗所書、站上屏風所書、或単子物件細書者、文士輩詩軸唱和者、則筆法或有奇妙、而彼人如得我国人筆蹟、則母論諸草優劣拳皆喜踊、求之者絡繹不絶、不但於写字官、行中之稍解書字者亦不堪<sup>⑤</sup>、

書画を請い求める様子がよく伺われるのであるが、朝鮮通信使にとって、特に、江戸、大阪、京都などの大都會での筆談・唱酬の交歓は決して楽なことではなかったようである。それを追認させるのが次の一文である。

二十二日病床についていた。しかし数多くの詩が山のように積もり次韻を請う。病の苦痛を抑えて次韻を作るに、体力が衰え耐え難い。数えると五七律絶句と古詩合わせて百三十余首であった。(中略)

唱和することが毎日このようであれば、倒れてしまうであろう。

明和元年正月二十二日大阪西本願寺での唱酬の様子である。病気にも拘わらず、書記としての職務を全うしようとする責任感が感じられる。さらに、このような唱和の様子は当時日本人たちの朝鮮の学問に対する関心の程度を端的に表しているといえよう。

『日東壯遊歌』、『海槎日記』は共に朝鮮通信使と日本の文人たちとの詩文唱酬の記述が目立つ。それは朝鮮通信使に対する関心の深さの一端であり、ただ異国人に接するだけでなく、文化や学術的交流を通して異国文物に接しようとする強い願望によるものである。さらに、それは自由に、自然発生的に行われたのである。故に、朝鮮通信使の果たした役割は政治的要素もあったものの、それよりはむしろ文化的、学術的交流のほうがより活発に行われたのであり、それが日本各地に残っている唱和集及び朝鮮通信使の訪日の諸記録から読み取れ

るのである。

なお、訪日中韓使にあった日本の文人は、江戸では太宰純、岡井孝先<sup>⑦</sup>、木貞貫<sup>⑧</sup>、洪井平<sup>⑨</sup>、柴邦彦<sup>⑩</sup>、岡明倫、尾張州では源雲<sup>⑪</sup>、源正卿<sup>⑫</sup>、岡田宜生<sup>⑬</sup>、京都では京都の三傑といわれる岡百駒<sup>⑭</sup>、清純<sup>⑮</sup>、芥煥<sup>⑯</sup>と接伴僧承胆維天長老に付き添い大阪から江戸まで同行した那波魯堂、大阪では求富鳳、木弘恭、備前州では井潜、近藤篤<sup>⑰</sup>、長門州では滝長愷、草安世、筑前州では亀井魯<sup>⑱</sup>等々名の知られた文士も少なくない。

では、このような両国の筆談・唱酬の具体的な内容は何だったのであろうか。通信使の正使趙曦は『海槎日記』甲申年（1764）二月二十二日の日記で「留江戸、聞製述書記之言、則太学頭林信言、与其子秘書監信愛来見、筆談而文筆無可観云、」と製述官、書記の言葉を借りて、林信言父子の文章の評価を述べている。林信言の先祖林道春（羅山）が太学頭として明暦元年（1655）の訪日の時、南壺谷と交した筆談では、その文が秀麗であったが、その後の太学頭は、代々世襲のせい、信言に至ってはその筆談・唱和文が優れているとは言えない、と記している。また、趙曦は、荻生徂徠は孟子を批判しているが、文章は優れていたと評している。

更に、時代は少し遡るが、朝鮮学士と日本の文人との学術的交流の様子が詳しく記されたものがある。それは享保四年（1719）の訪日の時、製述官として同行した申維翰に九つの質問をするのであるが、そのほとんどが朝鮮の朱子学に関するものであった。つまり、『朱子小学』、『近思録』等朱子学関連書籍に関するものが一番多く、その次は「零金朱笑」等書籍に記される語義を問うものであった。これらの多くは『退溪集』の語義を論ずるものであり、李退溪に対する関心は格別なものがあったようである。

このような問答を通して、日本の儒者の李退溪に関する関心の程度と朝鮮書の普及状況に関する関心の程度を伺うことができる。つまり、朝鮮通信使との問答を通して朝鮮の学問の動向を把握しようとしたのである。特に、李退溪の著書が日本の儒者たちに愛読され、大きな影響を与えたのは日本朱子学史の一

つの特徴的在り方でもあり、その学問的好奇心を与えたという意味での朝鮮通信使の役割を見過ごすわけにわいかない。

### 3、文化の相違による衝突

明和元年（1764）の朝鮮通信使の訪日を通して得られたものは、両国にとって、必ずしも肯定的な反響ばかりでなかったようである。それは、豊臣秀吉の朝鮮侵略以来抱いていた日本に対する激怒や文化授与国としての自尊心、優越感等とそれに対抗する日本側の自尊心及び文化・制度・風俗の相違からくる衝突が度々起こったのである。その具体的な例がいくつかある。

その一つは、江戸城での伝命礼が終って將軍主催の宴会の際、通信使は前例のない「空盃」で応じたのである。

もう一つは、朝鮮通信使の帰路大阪西本願寺で宿泊中通信使の一行都訓導崔天宗が対馬藩の通詞鈴木伝蔵なるものに殺害された事件が起こった<sup>19</sup>。この二つの衝突事件の真相を調査・分析することによって十八世紀後半における朝・日両国の文化、制度、意識の相違などが読み取れるのである。ことに後者は、事件に関する記録とその歌舞伎化、浄瑠璃化が多様に行われ、脚色・変貌していった。

ではまず、前者について『海樞日記』による記録を見ると、お酒を拒み、応接に問題が生じたのは一行が佐須浦についた宝暦十三年（1763）十月七日のことである。以下、その一文を記す。

初七日庚寅晴西北風留佐須浦、（中略）

太守送杉重饌盒及酒壺、而酒則以禁令至嚴、退却不捧、今後日共所納之酒、一併不捧之意、

対馬島の太守から送られた酒を、朝鮮の禁酒令によって、受け取ることができないと返したのである。これについて太守は次のように反応する。同年十一

月五日の日記によれば、太守が「本島は貴国の禁酒令を知ってはいるが、今後どのようなことが起るか知らぬ。また関白主催の宴会の時はぶつかる問題も多く生じるであろう。宴会の儀式に関することは口伝で取り行うこともできないので、若し使臣の数行の書面が得られれば、これを関白に伝えて宴会に臨む時煩わしいことのないようにしたいのであるが、」といったら、三使臣は相談して「此の酒を辞するのは我らに限ったことである。彼らが送る酒を受け取らないのは可能であるが、若し酒を我々が受け取らなくても、途中でなくなることも有り得る。思慮分別のない下輩たちが貪慾を捨てないかもしれない。故に、対馬島守にこの旨を伝え、今後は二度と酒を送ることのないようにしましょう。」といい、書契を作らせ対馬島守に伝えさせたのである。以下、その書契の一文を記す。

#### 却酒筆談

渡海以来、屢勸倅存、日昨又蒙臨賁、佩仰盛念、深慰鄙懷、伏惟信宿、尊体贈福、俺等到佐須浦時、足下饋以美酒、而弊邦有禁、(中略)

朝廷特念酒之生弊、自七八年来、嚴立禁条、公私宴享、一併不要、其有犯飲、決不容貸、是以為朝鮮臣民者、非惟不敢近口、亦不敢到手、況此奉

つまり、朝鮮の朝廷ではお酒を飲んで生じる不祥事を防ぐため、酒禁令を命じたのであり、今回の通信使の訪日においてもそれは通用されるので、お酒は断るとの内容である。この書契に対して対馬島主は次のように回答する。

貴国飲禁制、先達而、以御書翰委細被仰聞候付則、東武へ御伺申上候処、任御断、内御饗応之節御酒出候儀并被下物之内御酒相添来候分、御酒計者被相止、尤海陸御馳走所音物酒相添候儀モ相止候様、被仰出候、

韓使の要求通り解決されたのである。なお、江戸での新将軍謁見の時も空瓶

を以ってお酒を注ぐまねをし、「空盃」で応じたのである。これは両国の話し合いによって、衝突もなく宴会の行事が進められたのであるが、これもやはり両国の文化の相違からくるひとつの逸話なのである。朝鮮通信使にとって禁酒に対する態度は極めて厳しかったようである。事件の具体的なことは後述するが、いわゆる「唐人殺し」事件の被殺者崔天宗の次の態度がそれを端的に表している。即ち、崔天宗が鈴木伝蔵に刺され息絶え絶えになっていると、同僚は薬を煎ずる。この時、同僚は薬の中に酒を入れて飲むと気もどるかもしれないとすすめると、天宗は断固として「お酒は国の禁ずるものであり、たとえ死ぬことがあっても酒を飲むわけにはいかない、」と厳しい態度で応じたのである。

ではここで、いわゆる「唐人殺し」といわれる事件について考えてみよう。明和元年（1764）四月七日の夜、大阪西本願寺で起った崔天宗殺害事件は日本近世文学の中に様々な形で取り入れられ継承・変貌していった。つまり、この事件を素材とする歌舞伎及び浄瑠璃が事件後次々と脚色され、上演されていったのである。さらに、事件に関する民間の記録や随筆類も幅広く見られることから、直接事件処理を担当した幕府側ばかりでなく、事件に対する一般庶民の関心の深さの一端を垣間見ることができる。

では、まず『日東壯遊歌』における「唐人殺し」事件の記録を見てみよう。

七日上房執事大邸の人崔天宗が門を閉めて寝ていたところへ、ある日本人が胸にまたがって刃物で喉を刺す。

天宗は驚きおのゝいて叫ぶ。日本人は刃物を捨てて慌てて逃げる。（中略）

天宗は呼吸が荒くなり、明け方六時頃に息を引き取る。真に惨めである。

事件に対する朝鮮側の驚愕の様子と反応が生々しく表れている。さらに、『海槎日記』の事件に対する記録も上の文と同様である。以下『海槎日記』による事件の概要を述べる。

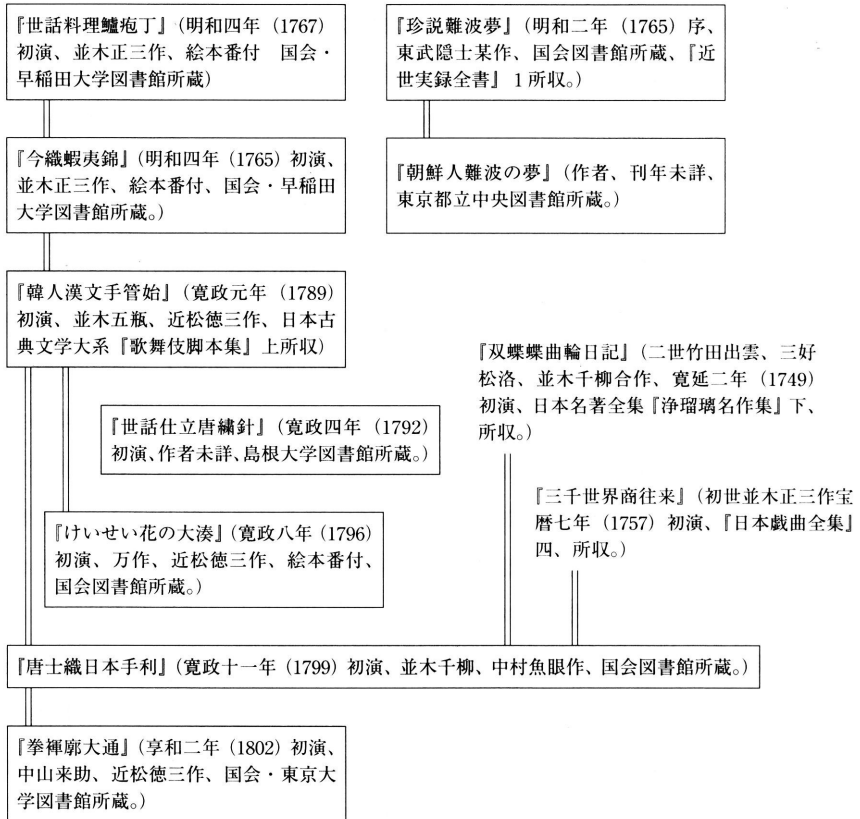
この事件について日本側は、最初は崔天宗の死を自害と断定したのであるが、その後が続けられる取り調べによってその真相が明らかになる。つまり、自害ではなく喉に差し込まれている鎗を手で握って放さないことから刺殺されたと判断する。加えて事件処理に当たった幕府の態度には国際問題化するのを恐れた様子が見え、それは直接担当した吉田勝右衛門の捜査態度などからも窺える<sup>20</sup>。その後、行方不明になった鈴木伝蔵を犯人と断定し、人相書が配られ、ついに逮捕される。生捕られた犯人は西本願寺において拷問され、刺殺の遺恨の原因を語る。それは、通信使の随行員所有の鏡紛失をめぐる争いがある、崔天宗が「日本人は盗みの仕方利根なる」といったことに対し、鈴木伝蔵が「朝鮮人は所々に而御馳走方より出候座敷飾之品々無挨拶取帰候故、盗之仕方に候得共、日本に而は右体之儀決而無之、盗不到」と反論する。これに崔天宗は腹が立ちその口論の相手を、大勢の朝鮮人の前で、杖で散々打擲したというのである。そこで、恥辱を受けたと思った伝蔵はその日の夜、崔天宗の寝間に忍び込んで殺害して逃走した、ということである。

この事件は両国にとって、大変衝撃的なことであった。世間の人々の関心を集中させたのもその事件の深刻さを物語っているといえよう。特に、事件後次々と脚色される演劇及び随筆、実録体小説の流布の状況はその事情を具体的に示していよう。このような文芸作品群をいわゆる「唐人殺し」という。以下「唐人殺し」作品群の系譜とその影響関係を整理すると表1の如くである。

日本の近世期における朝鮮通信使訪日の目的は徳川新将軍の襲職を祝賀するための親善使節として行われたのである。即ち、政治的目的をもって訪日したのであり、その裏には様々な問題が秘められていた。例えば、対馬藩主の朝鮮国書を改竄した問題<sup>21</sup>、幕府の内示によって行われた朝鮮通信使の日光東照宮を参詣させた問題<sup>22</sup>、豊臣秀吉が創建した京都方広寺の儀式に参加した問題<sup>23</sup>などがそれである。

しかし、近世期における両国の交流史を考える上で、朝鮮通信使が果たした役

表1 「唐人殺し」作品群の系譜とその影響関係



▲細糸線で囲んでいるのは「唐人殺し」作品群をあらわす。

▲二重線は影響関係を表す。

割として注目すべきことは、政治的なことよりは、むしろ旅先での日本の文人たちとの筆談・唱酬及び一般民衆との交流といった文化的、学術的な側面の方に関心が引かれる。それは十二回に及ぶ訪日の記録（『海槎日記』、『日東壮遊歌』、『海游録』等等）に記される筆談・唱和の様子の頻出からも類推されるのである。また、日本各地に残っている唱和集（『江関筆談』、『航海献酬録』、『鶏林唱和集』等）もそれを追認させるのである。

つまり、朝鮮通信使の訪日を通して文人及び一般庶民との文化的、学術的交

流などが、近世期の徳川政権の文運興隆策と相俟って、自由に、自然発生的に朝鮮通信使の旅先で行われたのであり、それは近世期の庶民レベルでの交流という面において、両国の文化史に大きく寄与したと言えるであろう。

#### 注

- ①『海槎日記』は朝鮮通信使の正使趙曦の日記で、その内容は①書記成大中の序文、②癸未年8月3日から翌甲申年7月8日までの日記、③酬唱録：製述官、書記、軍官の唱和詩300首、④各処書契；朝鮮国王の国書と別幅、幕府將軍の答書と別幅、禮曹參判、參議、佐郎から幕府執政、対馬島太守、接伴長老におくった書翰及び礼單、同回礼書翰及び礼單、⑤与彼人往復文字と状啓、⑥筵話・祭文・曉諭員役文・禁制条・約束条・日供、⑦三使一行名録、⑧路程記⑨日本信使行次の諸般軍令となっている。
- ②朝鮮通信使の三房書記として随行した金仁謙の長篇歌辞体紀行文である。これはハングルで記されている。
- ③『日東壮遊歌』、『海槎日記』等によると、「使臣は朝鮮国王の命に従って国書伝達及び諸儀式に参加するべきであるが、文士である自身は日本人に拜礼することはできない」と入城を拒んだのである。
- ④「草茅危言」、(寛政元年序)、(『日本經濟大典』二三所取)。
- ⑤甲申年(1764)正月十三日。
- ⑥甲申年正月十一日。
- ⑦荻生徂徠の門下の人で字は仲錫、通称は郡大夫とよばれた。江戸人。
- ⑧木貞貫(木村蓬萊)、名は貞貫、号は蓬萊山人、尾張の人、勝山藩の儒臣。
- ⑨名は孝徳、字は子章、通称は平佐衛門、号は太室、井上蘭台に学ぶ。古註学派、佐倉藩家老。
- ⑩柴邦彦(柴野栗山)、碩儒、名は邦彦、字は彦輔、号は栗山、古愚軒、程朱学派、徳島藩儒臣。
- ⑪源雲(松平君山)、本姓は千村氏、名は秀雲、字は子竜、号は君山、名古屋藩儒臣。
- ⑫字は子相、号は滄洲、1802年没。
- ⑬名は宜生、字は挺之、号は新川、尾張人、松平君山に学ぶ。
- ⑭本姓は阿野氏、名は白駒、字は千里、通称は太仲、号は龍洲、蓮池藩儒臣。
- ⑮清田儂叟、名は絢、字は君錦、江村北海の弟、越前藩儒臣。
- ⑯名は煥、字は彦章、丹邱、号は養軒、宇野明霞に学ぶ。
- ⑰字は子業、号は西涯、岡山人、岡山藩儒臣、河口静斉に学ぶ。程朱学派。
- ⑱名は魯、字は道載、号は南溟、僧大潮、山県周南に学ぶ。復古学派、福岡藩儒臣。
- ⑲明和元年(1764)の訪日の折には、上に述べた二つの事件の他に、もう二つの注目すべきことがあった。一つは壱岐島の沖で鷗木が折れて、正使船が沈没しそうになったところを武官の徐有大と柳達源の敏捷な行動によって幸い難を免れたこともあった。また今回の訪日の正使趙曦の功績ともいえることで、往路に佐須浦でその種子数斗を釜山に送り、帰路にはその栽培貯蔵法まで習って帰り、釜山と济州道に移植したのが孝行麻(薩摩芋)栽培の最初だったのである。
- ⑳拙稿、「朝鮮通信使と歌舞伎」、(『国際日本文学研究会集會議録(第十四回)』、国文学研究資料館、1990)参照。
- ㉑田代和生、「書き替えられた国書」(中公新書、1984年)参照。



②上垣外憲一、『雨森芳洲』（中公新書、1989年）参照。

③申維翰、『海游録』（姜在彦訳註、東洋文庫252、1974年）参照。

### 討議要旨

今関敏子氏は、日記、紀行文の表記の問題について、日本の場合漢文で書かれた日記と、仮名で書かれた日記は異なるが、韓国においても、漢文で書かれたものとハングルで書かれた日記との違い、さらに記録と文学の日記との違いがあるかどうかについて説明を求められた。発表者は、漢文で書かれた『海槎日記』にはあまり文学的な要素は見あたらないが、これに対してハングルで書かれた『日東壯遊歌』は韻文体であり、記録的な側面とともに、かなりの風景描写があり文学的要素が読みとれる。したがって、前者は記録としての価値が認められ、後者は文学として扱われているという答えがあった。これをうけてボート氏から、漢文体の紀行にも報告だけでなく漢文詩の混ざったものがあり、また逆に、ハングルで書かれた紀行も風景描写ばかりでなく、叙事詩的な面をもっているという意見が出された。発表者は『海槎日記』は分量も多く、内容も、日記、幕府との連絡事項やおみやげの目録、さらに詩も300首あまりと多彩であり、確かに文学的要素も含まれているといえる。一方『日東壯遊歌』は、短い文章でいいところだけを集中的に描写してゆくという特徴がある点前者と異なるとの説明があった。また今関氏の、日本の場合、とくに王朝文学においては紀行には、歌枕をたずねて詩を詠む、あるいは都回帰などの表現類型があるが、同様のものが韓国の紀行にも存在するかという質問に対しては、韻律を崩さないで風景描写を全文にわたってしているところに類型があると思われるという返答があった。

また、武井協三氏より、琉球使節の場合には芸能の交流が行われ、浄瑠璃、能による饗応があったとされるが、朝鮮通信使の記録に同様のものがあるかという質問が出され、朝鮮通信使の時も歌舞伎上演が行われているという返答があった。